

お妃候補は正直しんどい

MAIN CHARACTER
**登場人物
紹介**



フェリシア
リード国の王女。



ステラ
ヴェルデ皇国の
子爵令嬢。



イボンナ
ヴェルデ皇国の
侯爵令嬢。



ヴェルデ皇国皇妃
ランドルフの母親。
圧倒的な存在感を
放っている。



マルセル
クリスタにつけられた教師。
おおらかで親切。



ジゼル
ユグノ公国の王女。
クールな性格をしている。



クリスタ
小国レストードの王女。
周囲の人間に恵まれていなかった
前世の影響か、あがり性で
引っ込み思案な性格をしている。
大の布団(オフトウン)好き。



ランドルフ
ヴェルデ皇国の皇太子。
彼のお妃を選ぶため自国の
貴族の娘と近隣諸国の王女が
宮殿に集められている。

プロローグ

「はあ、しんどい」

真っ先にため息なんて自分でもどうかと思うけど、許してほしい。だって、こんな時に思い出すとは、運が悪いとしか言いようがない。

これから私、どうしよう？

辺りを見回して誰にも見咎められていないことを確認し、うつむく。

私の願いはただ一つ。

早く国に帰ってオフトウン——お布団じゃなくって、ベッドに潜り込みたい。

現在、ここヴェルデ宮殿の大広間には、華やかな令嬢たちが五十名程集められている。みな周囲諸国の王族か、ヴェルデ皇国の有力貴族の娘だ。

そして、貧乏国とはいえ一国の王女である私、クリスタ・レスタードにもお呼びがかかったため、この場にいる。

ヴェルデ皇国はフォルティヌス大陸一の大国で、領土は広く資源も豊か。教育水準が高く、資金も潤沢だから、喧嘩を売ろうなんて大それた国はない。

——その大国ヴェルデが、皇太子のお妃を選ぶのだ。

これはヴェルデの公式行事で、正確には『皇太子妃選定の儀』という。

国内の有力貴族や同盟を結んだ周辺諸国と、さらに密接な関係を築くことを目的に行われる。

——まったくはた迷惑な話……コホン、個人的な意見はこの際置いておくことにして。

要は皇太子が二十歳になった年に、この世界の女性の結婚適齢期である十六から十八歳の身分ある娘が宮殿に集められ、そこから皇太子妃を選ぶのだそうだ。

周辺諸国の姫が選ばれば、その者の出身国は安寧が約束される。ダメでも最終候補に残れば側室にはなれるという噂なので、みんなが張り切っているようだ。

私？ 私はどっちも遠慮したいし、今すぐ帰りたい……

「——見て、皇帝陛下と皇妃様よ。皇太子様もいらっしやるわ」

「素敵ね。あ、今、皇太子様と目が合った！」

「貴女じゃないわよ。あの人がすぐく場違いだから、皇太子様が驚かれたのでは？」

すぐ近くの令嬢が、私を見てひそひそと囁いた。なんだかとても居たたまれない。

自分でも地味だと思いう容姿とシンプルな黄色のドレスは、この場にそぐわないとわかっている。けどこれでも、精一杯おめかしをきたつもりなのだ。

高級なドレスの中で悪目立ちしてしまったこのドレスは、母親のお下がりだった。そして金色や銀色のまばゆい髪が多い中、私の髪は暗い茶色。

どうせ人数合わせでこの場にいるのだから、ぜひとも一抜けしたい。

後ろの扉を恨めしそうに盗み見ると、途端に衛兵と目が合う。彼は首を横に振った。

——ああ残念、途中退場はダメなのね？

仕方なく、視線を前に戻した。

広間の正面奥にはヴェルデ皇国の皇帝と皇妃が腰掛け、その傍らに本日の主役である皇太子がいる。

一番後ろのここからでは遠くてよくわからないけれど、ぼんやり見える皇太子はプラチナブロンドの髪で背が高い。聞こえてくる令嬢たちの噂話によると、彼は眉目秀麗、知勇兼備なんだとか。

——生まれながらに全てを持つ人っているのよね。顔良し、頭良し、家柄良し。こういう人をハイスベックって言うのかな？ 私もそうなら、何社も面接失敗しなかったんだらうなあ……

そう、私は元日本人。そして、小国レスタードの王女として、この世界に生まれ変わっていることを、たった今、知ったのだった。

第一章 郷に入れば郷に従えないかも

私の名前はクリスタ・レスタード。極寒の地にある小国レスタードの第二王女である。

北国出身なので肌の色は白く、髪の色はこの辺では珍しい茶色。亡き母が南の国の生まれで、髪の色が濃かったためだ。瞳は鮮やかな緑色をしていて、それが私の唯一の自慢だったりする。

全体的に小柄だけれど、胸は人より大きい。眠るのが大好きなので、栄養が背中側に回れず胸に行ったのかもしれないわね。

うちは貧乏国なので、王族といっても一般市民に毛が生えた程度の暮らしぶり。ただお金がなくともその分、国王である父と三つ上の姉に守られて育った。家族だけでなく、わが国のみんなが優しく、私は感謝している。だから贅沢は敵だし、しようとも思わない。

ただし、オフトウン——お布団についてだけは別。

わが国レスタードの特産品は水鳥の羽毛を使った寝具で、その温かさは大陸随一を誇るのだ。

——これで寝ないわけにはいかないでしょう？ 私はオフトウンが大好きなの。

さて、遡ること約二ヶ月前、私は父親であるレスタード国王にこう告げられた。

「クリスタ。すまないが、皇太子のお妃候補としてヴェルデ皇国に向かってくれ」

「私がお妃候補？ あの、お父様。冗談ですよ？ 私みたいに地味な娘を、大国ヴェルデの皇太

子様相手にするわけがありません」

私は父と一緒に笑い飛ばしてくれるものと思っていた。けれど、返ってきた答えは真剣なものだ。「ヴェルデ皇国より通達が来た。十六歳から十八歳の娘は全員参加するように、と。残念ながらわが国は逆らえない。いや、大陸中どこを探してもヴェルデに歯向かえる国はないだろう」

「そんな、横暴だわ！ かの皇太子様ってそんなに問題がある方なのかしら。ご自分の相手も自分で見つけられない程……」

「さあ。絵姿でしか知らないが、容姿はかなり整っておいでのようなだ。だが、決まったお相手はいないらしい。あの国は昔から『皇太子妃選定の儀』で妃を決めるしきたりだからな」

そう言って父は、詳しく説明してくれた。

でも、そんなの向こうの勝手だと思う。結婚相手くらい自前で調達してほしい。人見知りの私にどうしろというの？

それに弱小国であるうちには、余分なお金はない。

ただでさえ冬の間は雪に閉ざされて、農業も観光も一時ストップするのだ。わざわざヴェルデの皇都に行って、無駄なお金を使いたくないのに。

あの国は気候は良いものの、物価が高いと聞いている。私の往復と滞在費だけで、レスタードの国家予算をかなり消費してしまう。

「費用はなんとか工面する。皇太子妃や側室になれとも言わない。王女としての務めを果たし、無事に帰ってきておくれ」

「……わかりました。レスタードのためなのですわね」

母亡き後、大切に育ててくれた父の頼みだ。使命感に駆られた私は、承諾の返事をした。

この話でも少し早ければ、姉の役目だっただろうが、彼女はすでに結婚している。私では頼りにならないかもしれないけど、国のために頑張らなくては。

それからというもの、節約に頭を捻った。

——国の体面を保つ最小限のものだけ用意すればいいわよね？

私は、ドレスを新しく仕立てることはせず、侍女と一緒に母の形見を何着か手直しすることにした。地味な私だけど、裁縫は得意なのだ。

それから、付き添いも侍女と護衛兼御者だけにする。人数が少なければ小さな馬車で済むし、華美でないほうが道中襲われる危険も低いだろう。

そうして、ヴェルデ皇国に向けて出発する前日、姉が私に髪飾りを贈ってくれた。白鳥を象った、白い羽に黄色と緑色の宝石をあしらった繊細で優美な品だ。

「とても素晴らしいわね。でもお姉様、こんな高価なものだけじゃないわ」

そう言う私の手に、姉はその髪飾りをそっと握らせる。

「いいえ、せめてこれくらいはさせて。クリスタ、レスタードの誇りを忘れないようにね」

私は頷き覚悟を決めて、祖国を出発した。

大陸中央にあるヴェルデ皇国までの三週間の旅は、途中まで順調だった。

けれど、道中、小さな事件が起きている。

皇都へ続く街道を急いでいた私たちは、そこである男性を発見した——というより、危うく馬車で轢きそうになったのだ。

黒髪に粗末な身なりのその男性は、革袋を枕にして道に足を投げ出し、のんきに寝ていた。

今日はポカポカとした陽気なので、眠くなったのだろう。急ぎでなければ、私も休憩にして外でのんびりしたい。だから、気持ちはわかるのよ、気持ちは。ただど街道で寝るのは良くなかった。

——寝るならやっぱりベッドでしょ。

ここは皇都に続く一本道で、今は周辺諸国の貴族たちの馬車がバンバン通る。うちみたいな貧乏国ならいざ知らず、上下関係が無茶苦茶厳しいに違いないこんな大国では、貴族の馬車に轢かれても、泣き寝入りするしかないわよ。

御者より先に馬車を下りた私は、男性に詰め寄った。

私は緊張するとどもるのだけど、興奮したり怒ったりした時はスラスラ話せる。

「危ないわ。こんな所で寝るって正気なの！」

黒髪の男性に近づき、そう叱り飛ばす。

すると、男性は顔を上げ、ゆっくり目を開けた。若くて……かなりの美形だ。瞳は淡く綺麗な青。アイズブルーという言葉が頭をよぎる。

「ああ、ごめん。あまりにも気持ちのいい天気だったから」

彼の答えは予想通りだ。所作は汚れた格好に反して品があり、話し方も優しい。それに目をこすっている手は滑らかで、爪も綺麗に整えられている。

手に怪我をしているようだけど、少なくとも物盗りや労働者には見えない。

「あな、貴方。な、何者なの？」

彼にじっと見つめられ、私は途端にどもってしまった。初対面の人と話す時は、いつもこうなる。「何者って……見たままだけ。君こそ何者？ 春の妖精さん」

「なっ！」

——なんてことを言うの。妖精さんに失礼よ！

それはともかく、ここから退いたほうがいいということを、上手く伝えなければ。

困っていると、侍女が慌てて馬車を降りてきた。

「お知り合いですか？」

そう聞かれたので、黙って首を横に振る。自分の国から一步も出たことがない私に、国外の知人がいるはずがない。

「見知らぬ方とお話するなんて。さあ、先を急ぎましょう」

彼女は焦って馬車に戻るよう促すが、私はもう一度首を横に振った。安全な場所に移動したほうがいいと、きちんとすすめておきたい。

私の様子を見た侍女が、代わりに青年に聞いたです。

「貴方、一体ここで何をしていますのです？ 今は各国からヴェルデ皇国の都へ向かう人たちが使っ

ているので、この街道は危ないですよ」

「あ、あの。こ、ここじゃなく、べ、別の場所、なら……」

「何、妖精さんが連れていってくれるの？」

青年が柔らかに笑う。冷たい色をした青い目に、急に光が灯ったように見えた。

うっかり見惚れてしまったが、すぐに我に返る。

皇太子のお妃選びは明日で、今日中に皇都に入らなければ間に合わないのだ。ただでさえ、宿泊費を切り詰めようとギリギリに出発したので、遅れている。見ず知らずの彼のために、寄り道をしている暇はない。

「ごめ、ごめんなさい。こ、皇都に行く、から」
すると彼はこう答えた。

「そう。じゃあ、皇都まででいいから乗せて」

「なんてことを！」

侍女が叫び声を上げる。

彼女が驚くのは、無理もなかった。未婚の上流階級女性の馬車に、見知らぬ男性が同乗するなどまずあり得ない。それは私の国だけでなく、大陸全体に共通するモラルだ。

その常識を知らないということは、この青年は見た目通り、平民なの？ それとも私が旅装姿だから、商人の娘と間違えた？ 残念ながら小国のレスタードは、王家の紋章入り馬車でも気づいてもらえないことが多い。

きつぱり断ろうと思つて彼を見た私は、少し躊躇う。

なんだか疲れているようだ。このまま見捨てたら、引き続きこの場で寝てしまいかねない——そう、二度寝。二度寝の素晴らしさは、私が一番よく知つている。

「で、でしたら、ぎよ、御者……席、では？」

「姫様！」

侍女が私を「姫」と呼ぶ。けれど青年はまったく動じず興味もないらしい。

私が地味だから、ただの愛称とも思つたのだろう。

「わかつた。じゃあそれで。大丈夫、都に入つたらすぐに降りるから」

青年は立ち上がり、肩に革袋を担いだ。

背は高く、細身の割には意外にがしりしている。彼は迷いのないすっかりした足取りで、停めである馬車の御者席に向かつた。

「ま、待つて！」

私は自分でもびつくりする程大きな声を上げ、驚いて振り向く青年を手招きする。

彼の親指の付け根にある傷が気になった。放つておいて化膿でもしたら大変だ。

「水をお願い」

侍女に頼むと、彼女はレスタードの雪解け水が入つた私の水筒を持つてきた。

私は彼の傷を飲み水で洗う。祖国自慢のこの水は、清涼で美味しく、傷を洗うのにも良い。

洗い終わり水筒を侍女に返そうとした時、目の前の青年が水筒ごと私の手を掴んだ。

「うきゃ!？」

「まっ」

驚く私と侍女をしり目に、彼は水筒を私の手から奪い、中の水をごくごく飲む。

——喉が渴いていたのね？ それならそう言つてくれれば、別の水を用意させたのに……

手が……、初対面の男性の手が、触れてしまった。それにその水筒は私のもの。あまり意識したくないけれど、間接的にキスをしたことになるかもしれない。

「ふう。おかげで生き返つたよ」

黒髪の青年が、屈託なく笑う。

それは良かった。だけど私はちよつぱり複雑だ。

これからお妃候補として宮殿に上がるのに、すでに浮気をしたような気分になっている。とりあえず、私を責める侍女の視線は、無視することにした。

「そ、そう。それは良かったわ。あ、あとはこれでいい、はず」

持つていた手巾を包帯代わりに青年の手に結んだ。

「ありがとう、妖精さん」

——いや、だから違うつて。妖精はもつと可憐でしょう？

青年は目を閉じ、手巾に自分の唇を押し当てた。どうやら、彼なりに感謝の意を示しているらしい。何をしても絵になるわ。

この場所を通らなければ、出会うはずのなかつた人。都に着いたら、二度と話すことはない、大

勢いる皇国の民の一人。

それなのに私はなぜ、彼の仕草の一つ一つに目を奪われてしまうのだろう。

私の視線に気づいた彼が、首を傾げる。

視線が合い、緊張が増した。これ以上関わるのは、よくない。

私は黒髪の青年に素っけなく頷くと、さっさと馬車に乗り込んだ。

そして青年とは約束通り、都で別れる。

彼は親切にも宿を紹介してくれて、全員皇都に来るのが初めての私たちは、安価で快適な宿がとれて非常に助かった。

招かれたとはいえ、選考の日までの滞在費用は、自分たちで賄わなければならない。青年を連れてきたのは意外に良い判断だった。得意げな表情になる私に、侍女が呆れてため息をつく。

王女にあるまじき行動だと思っているのかもしれない。けれど、青年はいい人で、何もなかったのだから、構わないでしょ。

とはいえ、彼の去り際の一言は気になった。

「じゃあ、また明日。妖精さん」

——明日って？ まさか、馬車に同乗しようと考えているの？ 明日私は、宮殿に行かなければならなくて、お昼寝の場所探しに付き合っている暇はないのだけれど。

いえ、きつと、「さよなら」の代わりに「また明日」と言うのが、皇都流の挨拶なのだろう。

私はそう考えることにしたのだった。

翌日。私は宮殿の大広間に案内された。周囲を見回すなり、息を呑む。

クリスタルのシャンデリアが眩く輝き、白地のカーテンには金糸の見事な刺繍が入っている。調度品も豪華で洗練され、床は大理石、壁には精巧な彫刻があり、あちこちに瑞々しい生花が飾られていた。

そんな室内に、華やかな装いの令嬢が大勢いて、笑いさざめいている。どの女性も美しく、自信がありそうだ。

彼女たちはみんな、ヴェルデの皇太子のお妃候補だった。

——こんなにたくさんいるのなら、私一人くらい、来なくても良かったのでは？

壁際には、選考担当らしき青い制服の文官が何人も待機している。

「なんだか面接に来たみたい」

そう呟いた瞬間、私の頭の中に、とある記憶が一気によみがえった。

「嘘でしょう？ よりよってこんな所で思い出すなんて、運が悪いわ」

愕然と目を見開く。

そう私はこの時、この世界に生まれる前のこと——前世を思い出したのだった。

前世の私は、就職活動中の大学生だった。面接がかなり苦手で連敗記録を更新していたのだ。あがり性で、人前に出ると慌ててしまうため、面接では必ず何か失敗をする。

どもるのはまだ可愛いほうで、カバンを上下逆さに持って中身をぐちゃまける、なんてこともしょっちゅうだった。面接中にコンタクトを落したり、違う企業への志望動機を話してしまった。情けない程、ダメ。

世間では人手不足と言われているのに、就職先が決まらずに焦っていたのだ。

——誰にも必要とされないのは、私に原因があるからなの？

考えてみれば、離婚した両親は私を押しつけ合っていた。

普通こういう場合って、親権を争うんじゃないの？

けれど、親にもそれぞれ事情があるだろうから、逆らえなかった。うちは両親二人ともきつい性格だったので、私はあまり自己主張が得意ではない。

そんなわけで大学への進学を機に、一人暮らしを始めていたけれど、人と関わるのが苦手な私は、家にいることが多かった。毎朝、オフトウンからギリギリまで出ない。

そして私はその日、今度こそ落ち着いて面接官の目を見て話をしようと思っていたのだ。

話すことをまとめ、受け答えも繰り返し練習したから大丈夫。時間に余裕を持って家を出て、道を間違えないようにスマートフォンで確認しながら歩く。建設現場の前を通るまでは、全てが順調に思えた。

けれど——

「危ない！」という叫び声を聞いたのと、上を見たのは同時だった。

巨大なクレーンが倒れてきて、その後、世界は暗転する。

歩きスマホはやっぱり良くない。そう考えたのが、最期の記憶。

面接には悔いが残っている。結局、あがり性を克服できなかったし、どの企業からも内定をもらえなかった。結果待ちもいくつかあったけど、たぶんダメだったと思う。

こんな自分がお妃候補として面接——いや、選考を受けているなんて、一体なんの冗談なの!?

さて、そんなふうに以前の記憶を思い出した今、一つだけ納得できたことがある。

私のオフトウン好きとあがり性は前世の影響だ。レスタートで十八年愛情を受けて過ごしたにもかかわらず、好みや性格は変わらなかったみたい。オフトウンは偉大だ。

私の故郷レスタートでは、水鳥の羽を使った寝具が特産品。換羽期かんうきに落ちる羽を拾い集め、綺麗に洗って加工する。私はお小遣いをはたいて、オフトウン一式——敷布と上掛けを揃えたばかりだった。

ああ、早く戻って羽毛の上掛けにくるまりたい。そうしたら、転生という衝撃的な出来事やこの胃の痛い状況を忘れられるかもしれないのに……

そんな考えごとをしているうちに、『皇太子妃選定の儀』が始まっていた。

選ぶといっても、これだけたくさんいるので、いきなり一人に絞るということはない。

私には関係ないと下を向いていると、青い制服の文官が近づいてきて、出身国と名前を尋ねられる。

「レ、レレスタード国からま、参りました。ク……リスタです」

必死にそれだけ口にする。他の令嬢たちは、自己アピールまでバッチリこなしているみたいだが、私にはとてもじゃないけど無理だ。

「レレスタード国のクーリスタ姫、と」

目の前の文官が、そう言いながら手元の紙に何かを書きつける。

——いえ、そうじゃない……でも、今は明らかに私の喋り方のせいだ。

人数が多くてすごく忙しそうだから、わざわざ引き留めて訂正するのは申し訳なかった。

一礼した文官がすぐ次に移ったので、私はホッと胸を撫で下ろす。

良かった。志望動機とか皇太子妃として何を為したいかと問われなくて。

まったく答えられないし、考えてもいない。

名前も知られていない小さな国の王女だから大丈夫だとは思うけど、万が一にも誰かの興味をひいてしまうということもある。なるべくおとなしくしよう。

それにしても、集められた令嬢の人数は多い。まだ時間がかかりそうなので、私は考えごとを再開する。

昨日会った黒髪の青年が教えてくれた宿は、快適だった。備えつけのベッドはわが国の寝具には

劣るものの、よく眠れたと思う。宿の人も親切で、朝食の焼きたてパンは美味しかった。皇都のど真ん中にある割には、びっくりする程安かったし。

だから宿を出る時、心を込めて「また明日」と挨拶したのだ。それなのに、宿の主人に「もう一泊ですか？」と聞かれた。

——おかしい、皇都では「さよなら」のことをそう言うのではないの？

昨日の青年の言葉が「明日会いたい」という意味なら、今頃、彼はあの宿を訪ねているはずだ。私がおかしいと知って、彼は何を思うのだろう？

考えたくはないけれど、宮殿の関係者だという可能性もある。面接と同じように会社——じゃなかった、皇国に入った時点で選考が始まっていて、彼は事前調査していたとか？

まさか、手が触れたり御者席に男性を乗せたりしただけで、身持ちが悪いと評されることはないわよね……

か、間接キスはノーカウントで。向こうが勝手に水筒に口をつけたんだし、そもそも私のものだとバレていないはずだ。

そこまで考えて、ここにいる文官の顔を全員、確認してみた。

整った顔の男性は大勢いるものの、黒髪もアイスブルーの瞳もどこにもいない。

やはり彼は街の人のようだ。気にするほうがどうかしている。

何事もなくお妃選びをやり過ごすことを考えよう。レスタードの誇りを保ったまま、無事に帰ればそれでいい。

21 お妃候補は正直しんどい

私は故郷に置いてきたオフトウンを思い出し、ため息をついた。

「——はあ」

ドレスをキュッと摘む。

シンプルな黄色のドレスは薄緑の腰紐がついていて、前世にあった『菜の花』に似ている。そんな花の名前を思い出せたことは、嬉しい。少なくとも嫌な思い出ばかりではなかったようだ。

少し落ち着きをとり戻した私の耳に、周囲の令嬢たちの声が入ってきた。

「ねえ、ご存じ？ この中から十人しか選ばれないんですって」

「あら、こんなにたくさんいるのには？」

「ええ。国内だけで十分なのに、一応、諸外国の顔を立てなければならぬそうよ。でも、選ばれるのはわが国の方ですって」

「そうなの。皇太子様も国内の貴族から選ぶほうが安心よね」

この中に誰一人知り合いのいない私は、話には加われず、ただ聞くだけ。

そして、彼女たちの話が本当なら、案じることはなさそうだ。

面倒ごとに巻き込まれなくて良かった。皇太子のお妃なんて、これっぽっちも望んでいない。

ただ、レスタードのような小さな国の顔は、立てたって立たない。転がしておいてほしかった。遠くからわざわざ呼び立てるなんて、お金もかかるので勘弁してほしい。

しばらくして、ようやく何かしらの選考が終わったらしく、典礼長が声を張り上げた。

「これから読み上げる十人はこの場に残るように。その他の者は、速やかにご退室ください」

彼女たちが言っていた通り残されるのが十人だということは、出来レースだというのも本当なのかもしれない。お妃の候補は予め決まっています、残りは体面を保つために呼ばれたのだろう。

どちらにしてもこの先の二次面接は、私には関係ない。

「イボンヌ・バージェス、ジゼル・ユゲニオ——」

次々と名前が読み上げられ、呼ばれた令嬢がしらずに進み出る。それぞれ豪華なドレスをまとうていて、いかにも自信を持ってお妃選びに臨みましたって感じ。

最初から顔を出すだけと決めていて、途中から帰りたくなっている私とは大違いだ。

「——フェリシア・ロッシュ、以上」

私の名前を口にする事なく、典礼長が候補者の呼び出しを終える。思わずガッツポーズしそうになったものの、上品に肩を落とすことを忘れはしなかった。他の令嬢たちと同じく、ため息をついてもみせる……ただし幸せのため息だけだ。

「残念だわ。やはり家格がものを言うのかしら？」

「そうでもないですよ。伯爵令嬢がダメで、子爵令嬢が選ばれているもの」

先程アピールしすぎて文官を困らせていた令嬢たちは、一人も選ばれていない。

だけど、企業ならば熱心な人のほうが喜ばれるだろう。お妃でなく会社の面接なら、彼女たちが一番に内定をもらえるはずだ。

はきはき話せる人は、羨ましい。私にはない自信たっぷりな態度やどこなく品のある仕草も。

そこまで考えて、ふと頭に黒髪の青年が浮かぶ。私は雑念を振り払おうと頭を振った。

「速やかにご退室ください」と言われたことを思い出し、真つ先に部屋を出ようと振り向く。一番後ろにいてちょうど良かった。

けれど、出口に向かって歩き出そうとしたその時、凜とした声が飛ぶ。

「ちよつといいかな？ 私からあと一人、お願いしたい」

後ろを向いていた私には、その声を発した人物がわからなかった。足を止めて振り返ると、皇帝を見て慌てている典礼長の姿が見える。

「ですが、変更は——」

「構わぬ。好みにさせるがよい」

「ありがとうございます。父上」

どうやら先程の声は皇太子のものだったようだ。自分の父親に軽く頭を下げた彼が、壇を下りてくる。皇帝と皇妃は座ったまま動かない。

——まさか、皇太子様本人が直接指名なさるの？

さつき名前を呼ばれたのは、目の覚めるような美女や華やかな人、可愛い令嬢などタイプの違う十名の女性だ。まだ足りないなんて、皇太子ったら贅沢ね。きつとあの十人を軽く超えるくらい的美女を選ぶのだろう。

「——こちらをご覧になられたわ」

「いえ、私よ。なんて素敵なの！」

大広間を長い足で歩く皇太子を見て、先程選ばれなかった人たちが色めき立つ。

諸国の王女や令嬢たちは、彼が近くを通るとうっとりしたようなため息を上げる。彼が眉目秀麗だという噂は本当らしい。

プラチナブロンドの髪にシャンデリアの光が当たり、キラキラしていても綺麗な。背が高く、遠目でもスタイルが良い。白に金糸で刺繍がしてある上着や、銀色の耳飾りもよく似合っている。

そんな皇太子は大広間の中程を過ぎたのになかなか足を止めようとはせず、誰かを探しているみたいだった。期待を込めて見上げる令嬢たちの表情は、彼が通り過ぎると一瞬にして失意に変わる。まだ見つからないのかしら？ それなら無理に追加しないで、先程の十名で終わりにすれば良いのでは？

皇太子がこちらに近づいてくるにつれ、顔の輪郭がはっきりしてくる。確かに整った顔立ちだ。背の高さや体格、そういえば歩き方にもどことなく見覚えがあるような……

「嘘でしょう？」

私は思わず息を呑む。

——まさか双子、それとも他人の空似なの？ 髪の色が違うし、彼とはあの宿の前で別れたはず。昨日馬車に乗せた黒髪の青年によく似た皇太子は、突然、私の前で足を止めた。アイスブルーの瞳を煌かせて、嬉しそうに笑う。

「見つけた。やっぱりいたね、妖精さん」

「ぞ、ぞぞ、存じません。い、一体何を、お、おっしゃって、いらつしやるの……でしょう」

最後が消えそうになる。私は彼と視線を合わせないために、無理やり顔をそむけた。



——頑張れ、私。知らないと言いつ張つてこの場を乗り切れば、無事国へ、オフトウンのもとに帰れる！

「嫌だな。君の綺麗な緑の瞳を見間違えるとも？ それに、昨日きちんと予告しておいたはずだ。また明日ってね」

確かに言われたわ。だけど、あれは、さよならの挨拶じゃなかったの？

黒髪あの彼が、本当に皇太子だなんて……

「来てくれて嬉しいよ。レスタードのクリスタ王女」

目を見開き固まる私に、彼は丁寧ていねいに折りたたんだ手巾ハンカチを差し出した。

「はい、これ。君のだよね。名前が刺繡ししゅうしてある」

そう言われ、私は「しまった！」と思った。

レスタードは貧乏だから、みんなが物を大切にしている。そのため、自分の手巾ハンカチに名前を刺繡ししゅうするのは当たり前なのだ。

でも、国名までは入れていなかったはず。ならば、手巾ハンカチを受け取らなければ、人違いだと押し通せるかもしれない。もったいないけど諦めようかな。

いえ、皇太子は手巾ハンカチを私に返したかっただけで、その後改めて誰かに声をかけるつもりということもある。そうに違いない。だったらこは、お礼を言つて素早く受け取り引き下がろう。

「わ、わざわざ、あ、ありがとうございます。で、で、ではこれで」

私は彼の手から自分の手巾ハンカチをひったくると、一礼して後ろに下がった。こうすれば皇太子が安心

して本命のところへ向かえる。

「これで？ 嫌だなあ、これで終わりではないよ。私のお妃候補としてこの場に残って」

彼は大腿で近づいてくると、手巾ハンカチを持っていないほうの私の手を取った。そのまま自分の口元に持っていく、甲にサツと唇を落とす。

「よろしくね、妖精さん」

——で、てて、手〜！ くく、口〜！

私は頭が真っ白になった。一体どうしてこうなったのかわからない。

突然の出来事に、周囲の令嬢たちも呆気にとられている。

昨日たまたま拾った青年が皇太子で、彼のお妃候補に自分が残る。こんなことになるなんて思いもしなかった。あのまま彼を街道に置き去りにすれば良かったの？

焦っている私のすぐ側で、大きな声が上がった。

「納得できません！ どうしてそんな人が選ばれるのですか？ 彼女でいいなら、私のほうがずっと綺麗だし、皇国のためになるわ！」

声を上げたのは、私の隣にいた令嬢だ。美人で気合も十分。

帰りたいし面倒ごとで巻き込まれたくないので、私も彼女とチェンジしたい。

けれど皇太子は、冷めた目で問いかけた。

「綺麗？ 君の美的感覚は、私と大きく違うようだ。それに、私はいつ君に発言を許した？」
「くっ」

頬を朱に染めた令嬢は、私を睨むと足音高く広間を出ていった。辺りに、沈黙が広がる。

私だって彼女みたいにここから去りたい。

誰よ、美女が選ばれると思ったのは……って、私だけど……。こんなに地味なちんくりんが残るなんて、不満を訴えられるのも納得だ。

早く帰ってふわんふわんなオフトウンにくるまりたいのに。

「——では、よろしいですか？ 十一名以外の方はご退室を。選ばれた方は、次の選考の準備をお願いします」

対応の早すぎる典礼長が場をしめようとする。

十一名は中途半端だから、当初の考えを貫きましようよ？ 十名のほうがすっきりしているわ。

そんな私の訴えるような眼差しは、皇太子によって遮られた。

「妖精さん、じゃあ頑張って」

彼は私の耳に唇を寄せ、いい声で囁く。そして、あっさり自分の席に戻ってしまった。

準備も何も自分が残るなんて少しも考えていなかった私は、この後、何をすればいいのかわからない。ハイレベルな他の十名に聞こうにも……視線が痛いわ。

赤い髪の女性を筆頭に、選ばれた者はいったん、別室に下がるようだ。仕方がないので、私も華やかで美女揃いの彼女たちの後について行くことにした。

次が面接だとしたら、私はどうせ不合格だ。帰る時間が少しだけ伸びたのだと思うことにする。

別室に集められた令嬢たちはみんな、赤や青、桃や緑など様々な色合いの、レースや宝石をふん

だんに使った豪華なドレスを着ていた。仕立て直したお下がりを着ている私が、ここに紛れているのは、どう考えてもおかしい。

もしかして皇太子は、昨日のタクシー——馬車代として、私に箔を付けようと、二次選考に残してくれたのだろうか。そんな気遣いなんて要らないのに。

おろおろする私を残して、煌びやかな令嬢たちは、楽器を準備し始めている。

私は楽器など持ってきていない。顔だけ出したら帰るつもりだったため、父に来ていた通達ほとんど目を通していなかったのだ。

「さすがは皇太子様がお声をかけられた方ね。楽器も持たずにどうやって演奏なさるのかしら。もしかして、口笛？」

私をチラッと見た赤い髪の女性の言葉に、周りの令嬢たちがクスクス笑う。今のは嫌味……よね？

「まさか、そんな品のないことはなさらないでしょう」

「楽器も嗜まない方が、参加するはず不是吗」

彼女たちはそう言うけれど、ごめんなさい、ここにいます。

皇国の貴族は教養として、楽器を弾くことが必須なのかもしれないが、わが国ではそうではない。姉は横笛の名手で、お祭りに引つ張りだこでも、妹の私は聞くだけで満足しているし、口笛も満足に吹けない。

思えば前世でも音楽は苦手だった。人前に出ると萎縮してしまうので、どんなに練習していても、

本番は必ず間違える。おかげで、通知表は体育と並んで二か三。準備期間はちゃんと与えられていたから、必死で練習すればなんとかだったのかもしれないものの、ここに来る前まで、私は質のいい羽毛集めに奔走していた。

手伝えは安くすると言われ、水鳥の巣を掃除し、嬉々として羽を拾い集めていたのだ。おかげで、

最高級の羽毛布団——敷布と上掛けをお小遣いで買った。その寝心地は最高で、くるまるだけで温かく幸せな気分になれるし、節約にもなったから、後悔なんてしていない。

けれど、これからどうしよう？

見たところ楽器の貸し出しはなく、一人一人が専用の楽器を用意してきている。豎琴やハープ、フルートやチェンバロなど、いかにもお嬢様らしい楽器ばかり。

中でもフルートは純金のように、光輝いている。

あれ一つで、オフトウンがいくつ買えるだろう？ 夏用と冬用、保存用と旅行用を買ってもまだ

まだ余裕があるかもしれない。

いえ、そんな計算している場合ではなかったわ。

私は楽器がないと正直に申告することにした。

上手くいけば、脱落できる。私は期待を込めて文官に近づき、小声で呼びかけた。

「あ、あの……」

「なんでしょうか？」

文官の視線を浴び、またしても緊張する。

「も、申し訳ありません。が、楽器を持たずに、来てしまったので、か、帰ります」

一瞬驚いたような顔を見せた文官は、すぐ真顔に戻る。

「私の一存ではなんとも申し上げられません。上に確認してまいりますので、しばらくお待ちください」

でも残念ながら、辞退は認められなかった。事前に通告されていたのに忘れたほうが悪いと考えられたらしく、「なんとか頑張ってください」と言われる始末。

どうしよう？ やる気がないとバレたら、皇国を怒らせることにならないだろうか？ 何より気を遣ってくれた皇太子の顔を潰してしまおう。

——音楽で私にできることってあったっけ。残る手段は、まさか手拍子!?

大きな楽器は、文官の手を借りて運ばれる。私たちが広間に戻ると、次はやっぱり面接だった。楽器演奏つきで、壇のすぐ前に一人一人立つようだ。皇帝と皇妃、皇太子本人の目の前で話し、演奏する。

「それでは、これから二次選考を開始いたします。身分に関係なくご希望に進めますので、我こそは、と思う方からどうぞ」

さつきよりも距離が近いため壇上がよく見える。

ヴェルデの皇帝一家が並ぶと、絵画のように美しい。

皇帝ははつきりした顔立ちで髪は銀色、瞳がアイスブルーの方だった。皇妃は華やかな美貌で、プラチナブロンドの綺麗な髪に董色の瞳をしている。とても大きな息子がいる年齢には見えず、皇

太子のお姉さんだと言い張れるかもしれない。

皇太子は、お二人の良いところを受け継いだようで羨ましい。

そんな大国の威厳ある方々に見られると思うと、私の緊張はさらに高まった。

皇太子妃として残る気なんてさらさらなもの、他の令嬢と比べてあまりにも劣っていると、わが国の教育制度を疑問視させることになる。レスタードの評判が地に落ちるのは困るので、最下位でもせめて他とあまり離されずに踏み留まれますように。

「では、わたくしから。よろしいかしら？」

そう発言したのは、先程私に嫌味を言った縦ロールの赤髪の令嬢だった。彼女のピンクのドレスは光沢があり、デザインもすぐ凝っている。手にしている金色のフルートも高価な品だ。

最初が最も難しいから異論なんてもちろんなく、全員がすぐに頷く。

緋色の絨毯の中央に進み出た赤髪の彼女は、壇上に深々と礼をした。

「バージェス侯爵家、イボンヌ・バージェスです。皇帝陛下、皇妃様、並びに皇太子殿下におかれましてはご機嫌麗しく——」

なるほど、彼女はこの国の侯爵令嬢でお金持ちなのだ。挨拶も淀みなくしつかりしている。

私は自分のことのようにドキドキしつつ、彼女への質問を待つ。

「ヴェルデの皇太子の妃として、必要なこととはなんでしょうか」

典礼長が質問した。

「皇室への尊敬と、大国の重責を共に担う覚悟です」

彼女は堂々と答える。素晴らしいわ。質問されても動じないし、その後の落ち着き払った受け答えにも、私は舌を巻いた。

さっきの嫌味は……私の気のせいだろう。冗談で場を和ませようとしただけなのかもしれない。だって、ここに残るくらいだ。本当はいい人だと思う。

質問の後は演奏で、彼女はそれも完璧だった。

「皇太子様、小さな頃からお慕い申し上げておりました。『組曲ヴェルデの歌姫』より『歌姫の恋』を。拙い演奏でございますが、どうかお聞きくださいませよう」

そう言っつて、フルートを演奏し始める。もっと聞いていたいと願う程、プロ顔負けの腕前だ。柔らかに美しく音色には心が癒される。

ヴェルデの曲は前世のクラシックみたいな感じで、故郷レスタードの陽気な曲とは明らかに趣が違う。

選考官には音楽の専門家がいて、彼は口髭を撫でつつ、目を閉じ聞き入っていた。他の人も真剣に耳を傾けている。

演奏が終わり、楽器を下ろして深くお辞儀をする彼女。素晴らしかったし、オフトウンにくるまわりながら聞くことができれば、最高だっただろう。もう、彼女が優勝でいいんじゃないかな。

ところがそういうわけにはいかず、その後も次々と腕に自信のある令嬢が名乗りを上げた。

最初に登場したイボンヌがお手本のような態度を示したせいか、二次選考のレベルが格段に跳ね上がっている気がする。

「リード国から参りました。フェリシア・ロッシュです。よろしくお願ひしませう」

そう言ったのは、水色のドレスを着た可愛い系の美少女だ。声も可愛らしい。髪はふわふわのストロベリーブロンドで、砂糖菓子みたいな感じ。

「宮殿の第一印象はいかがでしたか」

「すごくいいと思います。来たことがなかったので、ずうっと懂れていましたあ」

典礼長の問いに対する答えは、あどけない。仕草も笑顔も、きゅるんとしている。

「貴女はこの国で何を成し遂げたいですか」

典礼長は少しも手加減することなく、質問を続ける。

———そ、そんな難しい質問するの？

心配になる私をよそに、彼女はすぐに答える。

「ええつとお。食に力を入れて、お菓子の文化を広めたいと思いまーす」

その後も、自分の好きな祖国伝統の焼き菓子について熱く語っている。

そうか、ここに残っているのは見た目が良いだけじゃなく、しっかりした考えを持つ人たちのね。だったら私も———

『外出禁止令を出してオフトウン文化を広めたいです』

これでは確実にアウトだ。わが国への印象が、ゼロどころかマイナスになってしまふ。何か、まともな答えを用意しておかないと。

私がそんな妄想をしているうちに、フェリシアが演奏を始める。可愛らしい彼女は、チェンバロ

の鍵盤に手を触れた瞬間、豹変した。曲はヴェルデのもので『恋する乙女』というらしい。でも、豪快で激しい演奏は乙女というより戦士のような。音楽の専門家も呆気に取られていた。

次は金髪でセクシー系の美女が進み出る。彼女の赤いドレスは首元の開きが深く、豊満な胸が覗いていた。私はいつも胸をできるだけ隠そうとしているけれど、彼女は強調している。そんな自信たっぷりな物腰が、彼女をより美しく見せていた。

「ヴェルデ皇国、子爵家のステラ・ガイヤールです。お目にかかれて大変光栄ですわ」
子爵家とはいえ皇国の貴族は、うちより断然お金持ち。

頼まれれば水鳥を追っかけ回したり、農作業や針仕事の手伝いをしたりする私とは、優雅さが違う。認めたくないけど、もちろん色気も。

遠い目になる私を置いて話は進んでいく。

「わが国の良い点と悪い点を一つずつお答えください」

——あ、これ前世の面接でもあった。

良い面を多めに答えて、悪いことは控えめに。だけど、悪い所が全然ないのもダメらしい。会社の研究をしていないと取られるそうだ。

「はい。良い点は、大陸一大きく人や物が集まることです。さらなる発展が臨めるでしょう」

おお、さすがだ。でも、大変なのはこの次。彼女はなんと答えるの？

「また、悪い点も同じです。大国であるがゆえに統治が難しい。ですから私は、皇太子様を常に支えられる存在でいたいと思います」

——すごいわ！ 質問に答えつつ自己アピールもしっかり盛り込んでいて、素晴らしい答えね。

素直に感心する私とは違い、何人かの令嬢が悔しそうな表情になった。みんな本気なんだ……

そしてステラはハープを演奏した。弦を弾くたび、大きな胸も揺れる。彼女の選んだ『ヴェルデに咲く花』も、やはり恋の曲なのだとか。

そんな魅力的な女性を前にしても、皇太子は無表情だった。まあ、あの端整な顔でにやけていたら、そつちのほうがびつくりするかも。

「次、いいかしら」

「も、もちろんどうぞ」

やる気のある令嬢が次から次へと前に出る。私は引きつった笑顔で譲るものの、内心ではかなり焦っていた。

みんなが演奏するのは恋や愛がテーマの曲で、腕前も甲乙つけがたい。私は皇国の曲をほとんど知らない上に、恋愛の機微があまりわからなかった。

あがり性で前世でも異性と付き合った経験がなく、恋や愛はどこか他人事だ。演奏ができないのに加え、恋に関する音楽の知識もないのでは、無教養の烙印をおされそう。

一番好きなのは眠ることで、オフトウンへの愛なら誰にも負けないのに。

「オフトウンの曲、なんてなかったわよね？」

合格なんて望んでいない。だけど、祖国の印象がマイナスとなるのは、避けたかった。

——面接もダメで演奏もダメな私に、何が残っているの？

「あの……この後、私でよろしいかしら」

思い悩んでいると、ハツとする程の美少女に尋ねられた。まっすぐな銀髪と深く青い瞳の彼女は、この中で一番綺麗だ。品のあるハイネックの青いドレスが、とてもよく似合っている。

「え？ ええ。も、もちろん構いませんわ」

急に決まった二次選考。もう少し考える時間がほしい。前の人の話を聞いて「同じです」は許されないみたいだ。

「ユグノ公国より参りました。ジゼル・ユグニオです」

前に進み出た銀髪の美少女が挨拶をすると、皇太子の口元に微かに笑みが浮かんだ。

ユグノ公国は栄えていてヴェルデの隣にあるので、彼女と皇太子は顔馴染みの可能性が高い。あの国に自分と同じくらいの年齢の王女がいたとは知らず、勉強不足が恥ずかしくなる。

「こ、このたびはようこそ。皇太子妃についての考えをお聞かせ願えますか」

典礼長が手元の書類をせわしくめくっている。それだけ彼女は皇国にとって、重要人物ということなのだろう。もしくは、彼女の人間離れた美しさに、圧倒されたのかもしれない。

「はい。これは、運命……だと思います」

優げやかなジゼルは好ましい。小声で話すので聞き取りにくいものの、彼女の周りだけ空気が違うように感じられる。続く質問にもスラスラ答え、彼女は今、外交政策の重要性を訴えていた。

——いよいよわからなくなってきたわ。何人残すつもりなのか知らないけれど、今まで見た誰もが素晴らしいから、私以外全員合格で良いのでは？

ジゼルの見事な豎琴の演奏が終わると、典礼長の声が響く。

「以上で二次選考を終了します……申し訳ありません。もう一人、残っておりますね」

告げられた言葉に、私はビシリと固まる。

——ま、まさか最後!?

みんなの視線が突き刺さる。緊張がピークで、手だけでなく足まで震えてきた。

「どうしました？ クリスタ王女、どうぞ前へ」

ドキドキしすぎて気持ち悪い。なんとか足を進めた私は、震えを鎮めようと手首を握り、貼りついた喉から無理に声を絞り出す。

「レ、レレレスタード国からま、ま参りました。ク、クリ、クリスタ、です」

もうダメだ。これ以上、話せる気がしない。

ドレスを掴んで膝を折り、礼をする。ガタガタ震えているせいで、姉からもらった髪飾りの羽が揺れ、小さな音が鳴った。

その時、姉の言葉が頭をよぎる。

『クリスタ、レスタードの誇りを忘れないようにね』

そうだ。ここで逃げては、わが国の恥になる。

私はまっすぐ前を向く——のは無理で、誰とも視線が合わないように皇帝の足下を見た。次いで大きく息を吸うと、挨拶を続けるために口を開く。

「皇帝陛下、皇妃様、こ、こ皇太子殿下におかれましては、た、たいへんたいへん……」

皇太子、と言おうとしてもつてしまい、その途端、頭が真っ白になった。急に上手く話せるはずはなく、自分でも何を言っているのかよくわからない。

「何、変態とな？」

前方から女性の冷たい声が飛んだ。

——まさか皇妃様？ どうしよう、怒らせてしまったの？

「ブフツ」

なんの音だろうと顔を上げると、皇太子が噴き出ししているのが目に入る。口元に手を当てて、さらなる笑いを堪えているようだ。

「これ、のように笑うでない」

言いながら皇妃も目を細めている。良かった、外交問題とかにはならないみたい。

——でも、私をこの場に残したのって、皇太子殿下よね？ その彼が真っ先に笑うなんてひどいわ。さっさと帰りたいところを、彼のせいでオフトウンにくるまれなくなっているのに。

オフトウンのことを考えたためか、怒りが込み上げてきた。目を伏せ再び深く膝を折る。

「大変失礼いたしました。本日はこのようなお傍近くでお会いすることが叶い、誠に光栄にございます」

ムツとしたおかげで、スラスラ話せる。それなら、ずっと怒っていればいいのかもしれないが、怒ると疲れるし、相手にも悪い。

ただ、今日はこれでこの場を乗り切って、大好きなおフトウンのもとへ帰ろう。私を突き動かす

のは羽毛の上掛けのふわっふわの肌触り。それにくるまることを考えて頑張るのだ。

「よい。緊張するくらいの方が好感が持てる。して、あなたが考える皇太子妃の資質とは何か？」

皇妃が私に質問した。

——キター——！

予想通りの問いかけは、どういうわけか典礼長ではなく皇妃からのものだった。

ここは慎重に。自分が笑われるのは構わないけれど、祖国が笑われるのは耐えられない。

「特に……特にございません」

会場がざわつく。誰も予想しなかっただろうその答えは、皇妃に対する侮辱と取られるかもしれない。けれど私は、あえてこう答えたのだ。

「ほう。特にない、とは？」

皇妃は私の意見を聞いてくれるようだ。公正な方で良かった。

「恐れながら申し上げます。大国の皇太子の重責は、常人には理解しがたいものがあるでしょう。それだけに、そのお考えは一般の民とは異なります。ですから妃となる者は逆に、民の気持ちに寄り添える普通の人、公正に判断できる者、皇太子の誤りを正せる者が望ましい、と私は考えます」

この質問の答えは、何も特別である必要はないと思う。ここにいる誰にでもチャンスはある……ただし、私以外。

つまり、他人と違う突飛な考え方をしている者は面接で不合格になるという前世の経験から、私のみならずと違う答えを述べた。

「普通、で良いと？」

厳しい声に、私は思わず顔を上げる。

——しまった。さっきの言葉も、もしかして、皇妃を侮辱したことになってしまおうの？

「た、たた、たぶん。こ、こ皇太子様のお好みにもよりますが」

はい、終了。

私の怒りは持続せず、また言葉に詰まり始めた。結局、皇妃を怒らせただけのような気がする。「言ってくれるな。それなら、普通のそなたが求めるものとはなんだ？」

ふいに笑みを含んだ渋い声が聞こえた。

——この声は皇帝陛下かしら？ 直々にお言葉を賜るなんて、恐れ多くて顔を上げられない。目を合わせるなんてもつての外だわ。

だけど皇帝は勘違いをしている。私は普通ではなく普通以下。ここにいる令嬢たちと一緒にされたら困るのだ。

第一、私が普通だとすれば、自分で自分を売り込んだことになってしまう。そんな気持ちはまったくなく、大国の皇太子妃なんてお断りだ。

ただ、相手は皇帝。大陸で一番偉い人なので、その言葉を否定するわけにはいかない。彼の面子を潰さないよう、私はありのままを答えることにした。

私の求めるもの——それは、大好きなオフトウン以外にあり得ない！

あの寝心地の素晴らしさをおいて他に語るものなどないだろう。上掛けにくるまる至福の時、寒

い日の温もりは格別だ。

「わ、私は故郷を愛しております。レスタードは小さな国ですが、自然が豊かで景色と水の綺麗な場所です。特産品は水鳥の羽毛を使った寝具で、最高の品質の素晴らしい寝心地と自負しております。どこが優れているのかと申しますと——」

怒った時とオフトウン愛を語る時の私は、どもらずに済む。趣味を熱く語るのであれば、つつかえずに話せるのだ。

けれどさすがに途中で気づいた。

まずい、このままだとただのオフトウン——お国自慢だ。皇国や他の国の方々の前で、自分の国だけを褒めるのは良くない。

その時ふと『平和』という単語が頭に浮かぶ。私はその言葉で話を締めくくことに決めた。

「——と、いうわけで、私は平和を、人々が笑顔で過ごせるオフトウ……お、穏やかな暮らしと平和を求めています」

無理やりこじつけたような気がしなくてもないけれど、これで質問にきちんと答えた。

伊達に何度も入社面接に落ちたわけではない。受け答えの上手な人の結びの言葉をしっかりと覚えてる。……って、上手かったら困るのか。あくまでこの場を乗り切ればいいだけなんだから。

「ふむ。そなたが故郷と家族を大切に思っていることはよくわかった」

やっぱり上手じゃなかったみたい。

良かった。大好きなのはオフトウンだけど、もちろん故郷や家族も大切だ。一刻も早くレスター

ドへ帰りたいという熱い思いが伝わったのなら、非常に嬉しい。

「ご質問は以上でよろしいですか？　では、演奏に移りましょう。どうぞご準備を」

典礼長に促されたけれど、準備も何も私は楽器を持っていない。

「どうしました？　さあ、早く」

おかしいわ。さつきちゃんと申告しておいたのに……

私が演奏できないことを知りながら典礼長は催促してくるし、令嬢の何人かはクスクス笑っている。困っていると、赤い髪の侯爵令嬢、イボンヌが進み出た。

「もしかして、楽器をお忘れですか？　わたくしのお貸ししましょうか」

「さすがはバージェス様。お姿だけでなく、お心まで美しいですな」

典礼長が彼女を褒めちぎり、その言葉に令嬢の何人かが首を縦に振る。

「い、いえ。ごめんな、さい。お気持ちだけで十分、です」

姉に教えてもらったことがあるため、フルートは音を出すのもかなり難しいと知っている。侯爵令嬢はすごい腕前だった。鳴らすだけでは笑われてしまうだろう。

つくづくきちんと練習していれば良かったと悔やむ。

収穫の時に歌うレスタードの『刈り入れの歌』や羽集めの時の『水鳥の踊り』を歌うのじゃ、ダメかしら？　途中みんなでガアガア合いの手を入れて、とっても楽しいのだけれど。

——ん、歌？　そういえば、歌のテストって音楽の時間にあるわよね。歌でもいいのかな？

私はとつさに皇太子を見た。彼は自分の唇に人差し指を当てて、微かに口を開けている。あれが

ただのセクシーポーズじゃなく、『歌え』という意味なら！

歌うだけならこの場でもできる。

ただ、ヴェルデの恋歌など知らない。

のんきにレスタードの曲を歌い、貶されたら立ち直れないかもしれない。それならいつそ、誰も知らない曲にしよう。この場にいるみんなが初めて聞くような。

私は心を決めると、大きく深呼吸をした。緊張しないように、しっかりと目を閉じる。

狭い部屋に一人にいるのだと思えばいい。オフトウンにくるまり上機嫌にいるのだ、と。

私はオフトウンへの愛を込め、この世界にはない調べを口にのせた。それは、前世でよく聞いたふるさとを想う歌だ。

オフトウンがあつたかくて、山と水の綺麗な私の祖国。レスタードは最高だ！

歌い終えた私は、ゆっくり目を開ける。広間はシンと静まり返っていた。歌詞も日本語のままなので、どこの国のどんな内容の歌なのか、誰にもわからないはず。これなら選考のしようがなく、可もなく不可もない。我ながらいい判断だったと思う。

ところが——

「素晴らしい！　いつ聞いてもいい曲だ。透明感のある歌声も実に良かった」
専門家と思われる選考官が、大きな声を上げる。

——え？　この歌この世界でも有名なの？

他の選考官も口々に何かを話している。

「歌詞は古代語でしょう。教養もあるし、女性の切なさがよく伝わってきましたね」
「ええ、そりゃあもう存分に。恋に破れた悲しみが胸を打つ、感動的な歌でしたな」

——いやいやいや。それ、かなり違うから。でもまあ、いいか。なんとか乗り切れそうだ。ホツとした私は、壇上に向かって深々とお辞儀をする。そのままそくさと下がった。

「楽器ではありませんでしたね。みな様、その点をお忘れなきよう」

一人、典礼長が苦虫を噛み潰したような顔をしている。そんなの見ればわかるから、わざわざ念押ししなくてもいいのに。

「以上で二次選考を終了いたします。陛下、よろしいですな」

「よからう。みなの方、大儀であった」

皇帝の言葉に、一同揃って頭を下げる。

——やっと……やっとね？ これで愛しのオフトウンのもとに帰れるわ！

「では、お妃候補のみな様方は元の部屋へ。只今より、選考会議を行います。ここで残るのは五名のみ。結果が出るまでお待ちください」

続く典礼長の言葉に私はうなだれる。明らかにダメな人は外させてほしい。さらに待たされたのでは、お土産を買う暇がない……

そんな不満が伝わったわけではなさそうだが、典礼長がつけ足した。

「惜しくも選ばれなかったみな様には、後程、謝礼と記念品をお渡しいたします」

——あら、残念賞があるのね？

そうか、皇太子が私を引き留めたのは、このお礼を受け取らせるためだったのか。もしかしたら、さつきも笑うことで皇妃から庇かばってくれたのかもしれない。楽器がなくて困っていた私に、歌えと教えてくれた。

彼はいい人だ。あと少しで帰れるし、お土産までもらえるなんて最高ね。

そして皇太子妃の候補者たちは、全員控室で待つことになった。部屋に入ったのは私が最後に、扉を閉めた直後、鋭い声が飛ぶ。

「ちよつとどういうこと？ 失敗しろつて言ったのに間違えずに弾くなんて聞いてないけど」

侯爵令嬢イボンヌがフルートを持ったまま、若草色のドレスの女性を怒鳴りつけた。

「申し訳ございません。ですが、イボンヌ様は大変お上手でしたので、残るのは確実だと思います」

「ふん、当たり前じゃない。わたくしを誰だと思つて？ 貴女のような出来損ないとは違うのよ。

一緒にしないでちょうだい」

こ、怖い。これがさつきまで上品に振る舞っていた人？ 誰だ、一瞬でも彼女をいい人だと思つたのは……やっぱり楽器を借りなくて正解だった。

「ちよつとお、すごくうるさいんだけど。頭も痛くなるしやめてよねー」

侯爵令嬢に意見したのは、ふわふわのピンクの髪のが可愛らしい王女、お菓子好きなリード国のフェリシアだ。勇気ある発言で、理不尽に怒られている女性を救ってあげたらしい。

「はあ？ 貴女、誰に向かって物を言っているの？」

「誰つて？ ただの侯爵令嬢じゃない。怒るんならこじやなくてよそに行つてよお」

違った。単に怒鳴り声が気に障^{さわ}りただけのよう。でも、イボンヌのほうが取り巻きの多く、彼女たちが揃って反撃している。

「貴女^{あなた}、何様のつもり？ イボンヌ様に向かつてその言い草は何なの」
「そうよ。王女といつても、うちより小さな国じゃない。生意気よ」

中心で腕を組んでふんぞり返っている赤髪のイボンヌは、まるで女王様だ。残念なことにハーブを弾いたセクシーな子爵令嬢ステラも、彼女の取り巻きの一人。

どうやらこの中の令嬢は半分が皇国の貴族で、侯爵令嬢であるイボンヌに逆らえないみたいだ。「おわかり？ わたくしの味方は大勢いるのよ。小国の分際^{めづ}で目障りね」

言いながら、イボンヌはこちらまでギロリと睨^{にら}む。

——え、私？ 何もしていないけど。それにここにいる半分の人^{ひと}は周辺国の王族よ？ 皇太子妃になりたいのなら、もうちょっと気を遣ったほうがいいのでは？

「ひどいっ！ みんなで私をいじめて。泣いちゃうから」

案の定、ピンクの髪のフェリシアが、うえーんと泣き出す。周辺国出身者として団結するべき？ けれど公国の銀髪の王女、ジゼルは、持ってきた本を読み始めている。こういった採^とめ事^{こと}には関わらないと決めているようだ。

「はあ、いまましい。それにしても、いつまで待たせる気なのかしら」

女王様——侯爵令嬢イボンヌがイライラと歩き回る。その声を聞き、ピンクの髪のきゅるるん王女、フェリシアは、一層声を張り上げた。

「うえーん、ひどおい。うえーん」

「うるっさいわね。静かにしてちょうだい」

「えーん、えーん」

まさか、この状態で選考が終わるまでずっと過ごすの？ ストレスが溜まりそうだし、胃が痛い。お妃選^{えん}びつて本当にしんどい。これなら、就活のほうがよっぽどマシだ。

「あのお……」

勇気を振り絞って声を出した私に、その場の視線が集まる。

「何よ」

取り巻きの一人が私に詰め寄るが、ここで怯^ひんではいけない。面接の心得を教^おえてあげよう。

「もうその辺にしたほうがよるしいのではないですか。人の目もあることですし」

そう、今の私はちよっぴり怒っている。だから普通に話^はができた。

文官不在とはいえ、宮殿の女官は壁際に控えている。当然今までのやり取りを彼女たちは聞いていた。

前世では、控室にも監視カメラがあったり係の人がいたりして、建物に入った時から入社試験が始まっていた。待つ間の態度も評価に繋がるのだ。

皇太子だつて表面だけ取り繕^{つくろ}うお妃より、優しい人のほうがいいわよね？

ところが、イボンヌは聞く耳を持たなかった。周りをバカにしたように見回す。

「人？ 結果待ちのわたくしたち以外に、誰かいるとでも？」

驚いた。大陸の中には、使用人を家具同然に扱う国もあると聞く。あの噂は、あながち間違いはなかったのだ。ヴェルデ皇国の貴族は、使用人を人と思わないらしい。

「そのような言い方は良くないですわ。仮にもお妃候補なのではないでしょうか？」

この状況を見過ごすことなどできない。おまけで選ばれたとはいえ、私は最後までレスタードの王女として、誇り高く正しく在りたいと思う。

「わたくしが、ただの候補？」

しかしイボンヌは、私の言葉に気にも留めなかった。手の甲を口に当て、カラカラと笑う。

「貴女、やはり田舎者ね。皇太子様が珍しいから残しただけなのに、いい気になっちゃって。このわたくしが、なんの策も講じてないとお思い？」

「それってどういう——」

そう言いかけた時、扉がノックされ、文官の一人が部屋に入ってきた。

「大変お待たせいたしました。ではみな様、広間へどうぞ」

青い制服の彼が一礼すると、女王のようなイボンヌはコロツと態度を変える。

「あら、そんなこと。お勤め大変ですわね。わたくしたち、ちつとも待つておりませんわ。そうでしょう、みな様」

一瞬で感じ良く優しい令嬢に様変わり。私は思わず目を疑った。

「ええ、もちろん。イボンヌ様とご一緒ですもの。嬉しいし退屈いたしませんでしたわ」

「本当に。さすがは侯爵家の方ね。お優しいこと」

取り巻きたちが口々に褒めそやす。普段から、彼女のこんな態度に慣れているのだろうか。

それにしても、泣いていた王女は平気なの？

そちらを見ると、ピンクの髪のアリシアは、いつの間にか泣き止んでけろつとしていた。私の前をさっさと通り過ぎ、呼びに来た文官にこやかに笑いかける。

「どうもありがとうございます」

——ええっと、何これ？ もしかして、心配しなくても平気だったってこと？

壁際の女官たちは無表情を貫いていて、私だけがこの場に馴染めない。

そんな中、私の近くを通った銀髪の美少女が、小さく声をかけてくれた。

「駆け引きも必要。ともに相手をしてはダメ」

お妃選びは面接とは違うみたいだ。

でも、ユグノ公国の王女ジゼルは、なんていい人なの。姿だけでなく心も綺麗で、まるで天使！ 銀色の髪の優しい彼女が最後まで残ってほしいと、私は願う。

そして元の広間に戻った私たちは、ズラツと横一列に並べられ、五名の発表を待つことになった。

「それでは、選考の結果を発表いたします。えー、甚だ不本意ではありますが……」

「典礼長、不服か？ 他の者と職務を交代しても構わぬぞ」

「め、滅相もございません。今のは単なる言葉のあやで……」

皇妃に注意されたためか、典礼長の歯切れが悪い。

——手違いでもあったのかしら？

何があったか知らないけれど、すぐに発表してぱっぱと終わらせてほしい。記念品をくれると言っていたから、城に飾ってみんなに見に来てもらおう。

終了まであとわずか。今度こそ、故郷のオフトウン目指して出立できる！

「ウオッホン。えー、それでは発表いたします。一人目、ステラ・ガイヤール様」

赤いドレスの胸の大きな子爵令嬢の名前だ。ハープの腕前と、良い点と悪い点の受け答えが評価されたのだろう。女王様の取り巻きだということを除けば、彼女に欠点はない。

「二人目、ジゼル・ユグニオ様」

ジゼルは、あの銀髪の美少女！嬉しくて、私は思わず声を上げそうになる。

皇国以外の国からもちゃんと選ばれた。公正に選考されているようで良かったし、彼女にはぜひとも頑張ってもらいたい。

「こ、ここからは意見が割れたところでして……」

「前置きはいいい。早くせぬか」

典礼長の言葉に、イライラした皇妃の声が続く。

皇妃の言う通りよ。あと三人、もったいぶらずに早く発表してほしい。わくわくしている私とは違い、周りからはピリピリした空気が伝わってくる。女王ことイボンヌは、まだ呼ばれていないため、顔が真っ青だ。

「三人目、フェリシア・ロッシュ様」

二人続けて周辺国の人とは縁起がいい。ピンクの髪の毛のきゆるるん王女は、食についてしっかりと

た自分の考えを持っていたことが幸いしたのだろう。

最初に聞いた『諸外国の顔を立てるために、呼んだだけ』というのは嘘だったのだ。けれど、さすがに後は、皇国の人も。

「四人目、イボンヌ・バージェス様！」

気のせいかな、典礼長が一段と声を張り上げた。

赤髪の侯爵令嬢イボンヌは、ようやく名前を呼ばれて、ホッとしている。しずしず進み出て、上品にお辞儀をした。

さて、残りはあと一人。

「五人目、クリスタ・レスタード様」

突然自分の名前を呼ばれ、私は耳を疑う。会場も静まり返った。典礼長の説明は耳に入ってこないし、目の前が一瞬、真っ暗になる。

前世ではただの一度も、面接を通ることはなかったのに、私はどんな失敗を、いえ成功を……この場合はやっぱり失敗を、やらかしてしまったの？

いくら考えてもわからない。

どうにか発言はしたものの、ヴェルデ皇国の望む答えではなかったはずだし、楽器を持ってきておらず歌でごまかした。私が残るなんておかしい。きっと何かの間違いよ！

選ばれなかった人たちのすすり泣きが聞こえてくる。正直、代わるものなら代わりたい。

「こたびは己の意見を持つ者を特に評価した。以上だ」